

三重大学附属図書館リニューアル記念

# 特別展示「藩校の漢籍」

平成25年4月10日(水)～5月8日(水)



『資治通鑑』全百四十八冊

三重大学附属図書館

## ご 挨拶

三重大学附属図書館は昨年度の耐震化にともない全館を改修し、4月からリニューアルオープンいたしました。また、皆様が日頃御覧になるところではありませんが、和本・漢籍を収容する貴重書庫を拡充することができ、管理・運営の効率が大きい向上しました。三重大学附属図書館は、前身の三重師範学校・三重農林専門学校から引き継いだ本を母体とする和本1000点 漢籍300部を所持しています。漢籍については現名古屋大学教授の井上進先生が平成7年に調査をして『三重大学漢籍目録』を作成してくださいました。和本は、平成23年度より附属図書館研究開発室協力大学教員の人文学部吉丸雄哉先生により、調査が進んでおります。漢籍に関しては、本年度中の、全国漢籍データベースへの登録を目指しています。和本に関しては、平成26年度での冊子目録・データベースの完成を目指しています。研究・教育に所蔵資料が活用できるよう、附属図書館は邁進しております。道はまだ途中ですが、今回は「藩校の漢籍」と題し、資料整理の成果を特別展示として紹介いたします。

三重大学附属図書館長 吉岡 基

## 三重の藩校と漢籍

今回は、「藩校の漢籍」と題し、幕府の学校の刊行物のほか、現在の三重県にあった、江戸時代の藩校の出版物・蔵書を紹介いたします。現在の三重県は、江戸時代には複数の藩があったのですが、規模が大きいのが、伊勢と伊賀を領有した津藩と、三重では松坂・白子や東紀州を領有していた紀州藩でした。

### 有造館と出版事業

津藩には有造館という藩校がありました。有造館は津藩中興の明主といわれた、十代高兌（たかさわ）が文政二年（1819）に設立を計画し、翌三年（1820）に現在の津市丸之内にあたる（現NTT丸の内ビルがある）地に開設しました。戦災の影響もあり、遺構はなく、移築された入徳門のみ津城公園で姿をとどめています。当時、津藩は重度の財政難でしたが、藩校による人材育成に藩の命運を託し、万難を排して設立に踏み切りました。なお、文政四年（1821）に伊賀上野城内にも支校を開設し、講堂の崇広堂が現存します。

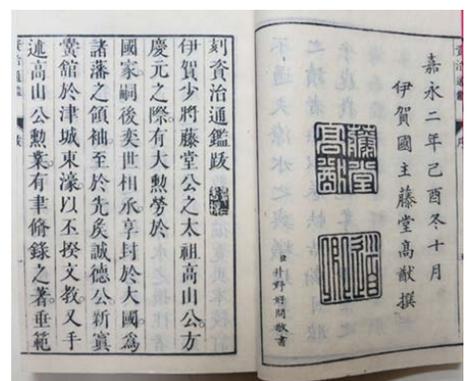
有造館は、津阪孝緯（東陽）や齋藤正謙（拙堂）といった名のある督学（校長）のもと、文武に秀でた人士を多く育成したほか、さかんに出版活動を行いました。有造館の出版物は、全国に普及し、諸藩の教育に大いに役立ちました。

有造館の蔵書・出版物は、三重県立図書館と津市図書館に多く入っており、三重大学附属図書館の本はそれほど多くないのですが、重要な書籍が入っています。

当時は漢学が学問の中心であったため、藩校の出版・蔵書は漢文の書物（漢籍）が圧倒的多数でした。全国に知られた有造館の漢籍を見て行きましょう。

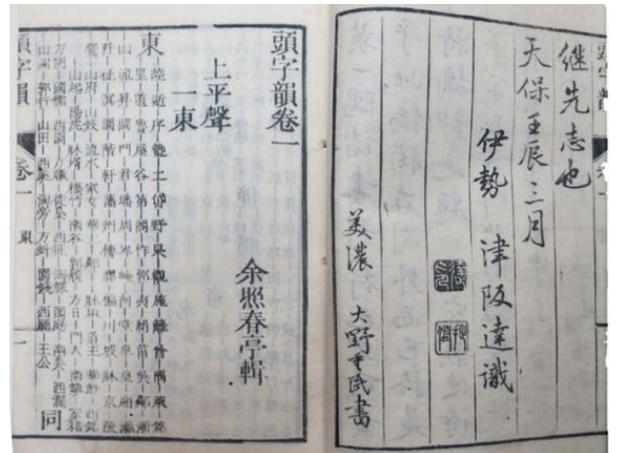
#### 1. 資治通鑑二百九十四卷 百四十八冊

史部編年類。宋、司馬光撰。元、胡三省音註。天保七年（1836）津藩有造館刊。嘉永二年（1849）序印本。編年体で、戦国時代（BC400年頃）から五代末（1000年頃）までの歴史を記し北宋神宗の元豊七年（1084）に成りました。諸本を広く参照して編まれた中国の代表的史籍で、正史以上に普及し、歴史を学ぶ拠り所とされました。題名は「往事に鑑み、治道に資有」ることから神宗が命名しました。翻刻は、広く流布していた胡三省音註本を底本としています。藩校の出版事業としては、水戸藩『大日本史』、高田藩『明史稿』などとともに最大規模のものです。『資治通鑑』を愛読していた十一代藩主高猷（たかゆき）による企画でしたが、学者を総動員し、藩をあげた刊行事業でしたが、全巻刊行までに、十四年の歳月がかかりました。江戸・京都・大坂などの書肆から発売したため、諸藩に広く普及し、学問・教育の役に立ちました。



## 2. 頭字韻五卷 四冊

經部小学類。清、余照撰。天保三年（1832）刊。天保四年（1833）跋。津藩有造館印本。登録番号：821-Y724。本書は、詩に用いられる熟語の頭字を韻にしたがって配列したもので、詩作の参考されました。津阪孝綽（東陽）の息子達（拙脩）が東陽の意を受け継ぎ、清、余照の『詩韻珠璣』から抜粋して編みました。詩文が作られて文学が栄えることが国家の安定につながるという「文章経国（もんじょうけいこく）」という思想が儒学にはあり、詩作も必須技能でした。



## 3. 経世文編抄七集 二十一冊

史部政書類清、賀長齡輯。斎藤正謙編。甲乙集 嘉永元年（1848）、津藩有造館木活字印本。丙丁集 同三年（1850）、津藩有造館木活字印本。戊己集 同五年（1852）、津藩有造館木活字印本。登録番号：322.22 G11。清の賀長齡『皇朝経世文編』から斎藤正謙（拙堂）が重要な項目を抜粋し、毎編の終わりに評語をつけた本です。『皇朝経世文編』は清の役人であった賀長齡が、清代の官文書・奏議・論著・書信・筆記などから現実的な統治政策に関する文章を集大成したものです。底本は清の1827年に刊行されました。この本は、彫った版木をつかって印刷したのではなく、木で作ったブロック状の活字を並べて印刷しています。他の本とくらべて、字の並びが等間隔になっていることがわかります。写真の見開きのうち、右の「津藩有造館聚珍板」の下にあるのが有造館の蔵書印です。左の「適園文庫」は三重県師範学校教諭阿保友一郎の旧蔵書であることを示します。



#### 4. 聴訟彙案三卷 三冊

子部法家類。津阪孝綽撰。天保二年（1831）、津阪氏稽古精舎刊本。登録番号:322, 22 Ts97。元から清までの裁判の判決のなかで、公明なもの九十条を漢文で収録したものです。序文によれば南宋の『棠陰比事』を意識していたことがわかります。『棠陰比事』は裁判小説で、秀でた犯罪捜査や判決を多数収めました。なお、序文を書いた斎藤正謙は『棠陰比事』の和刻本を所有しており、その本は現在は三重大学附属図書館が所蔵しています。



#### 5. 聴訟彙案三卷 三冊

子部法家類。津阪孝綽撰。天保六年（1835）か。津藩有造館刊本。題簽に校正の字があります。4『聴訟彙案』が天保二年に津阪東陽の個人出版として先行して刊行され、のちに4『聴訟彙案』に修訂を加えた5『聴訟彙案』が有造館から刊行されたと考えられます。同じような内容の本ですが、若干の違いがあります。版木を使いますので多く刷ると版木が痛みます。4『聴訟彙案』に比べて5『聴訟彙案』のほうが、わずかながら版面に痛みがあります。4本「稽古精舎版」の左の匡郭（縦線）と、5本「津藩有造館蔵版」の左の匡郭（縦棒）を比べると、あるいは「東陽先生著」の左をみると、5本に欠けが認められます。5本が4本の版木の一部を削って埋木したほか、その他大部分を使いまわしたためと思われる。





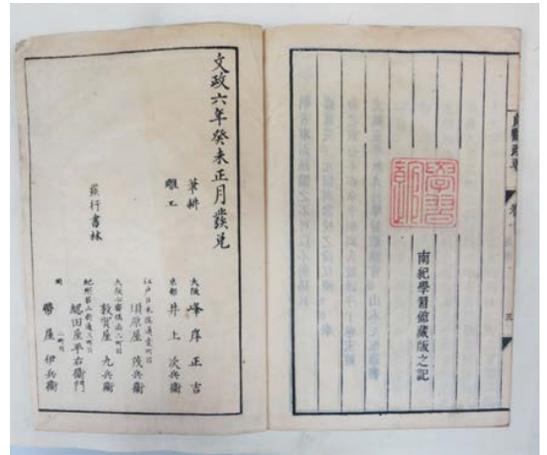
## 紀州藩の藩校と出版

三重の藩といえば、津藩が有名ですが、東紀州のほか、松坂・白子・田丸といった要地やその他伊勢の多くの村を御三家の一つである紀州藩が領有していました。紀州藩では吉宗時代の正徳三年（1713）に儒学の講堂が設けられましたがその後荒廃し、紀州藩で藩校制度が確立したのは、十代治宝（はるとみ）による寛政三年（1791）の学習館の設立からです。文化元年（1804）に松坂に松阪学問所が設置されました。洋学を講じる紀伊蘭学所は安政三年（1856）に江戸藩邸に設けられました。

学習館も出版事業を行なっています。また紀伊蘭学所・松阪学問所の蔵書のうち、三重大学附属図書館が現在所蔵する本もいくつかあります。今回は二点ご紹介します。

### 6. 貞観政要十卷 十冊

子部儒家類。唐、呉兢撰。元、戈直集論。山本維孝校訂。文政六年（1823）、紀州学習館刊本。登録番号：W125.3 G54。貞観年間（627-629）の唐の太宗と群臣らとの問答や君臣の事跡を四十門に分類編纂した本です。唐の玄宗の開元八年（720）以後に成立したと思われます。太宗の治世は貞観の治と呼ばれ、太平の世の模範とされました。日本でも古くから為政者の政治教科書として、皇族・貴族の間で読まれ、江戸時代では武士の教養書として重視されました。底本は元の戈直が諸本を整理して注を加え、さらに名家の議論を加えた「集論」本です。版元には、総田平右衛門と帯屋伊兵衛という地元の本屋のほか、江戸の須原屋茂兵衛と大坂の敦賀屋九兵衛が認められます。学習館による和刻本は残存数が多く、広く普及したことがうかがえます。右面の朱印が学習館の蔵版を示す印です。



### 7. 英国志八卷 八冊

史部地理類。英国、トマス米爾納撰。英国、幕維廉訳。文久元年（1861）、長門温知社刊本。印記「紀伊蘭学所」「松阪学問所」。登録番号：233 Mu96。イギリスの歴史・地理を教える本です。英国人のトマス米爾納（トーマス・ミルナー）が書いた本を、同じく英国人で中国へ渡った宣教師の幕維廉（ウィリアム・ミューアヘッド）が漢訳し、さらにその本を日本で重刻したものです。西洋知識ですが、漢文で書かれているので漢籍です。萩藩洋学所博習堂で教科書として用いられたと思われまますが、その他の藩校にも収蔵されました。蔵書印「紀伊蘭学所」と「松阪学問所」が認められます。





## 幕府の藩校

幕府の藩校（通例として幕府の学校も藩校と呼びます）は、前身に林家の私塾や湯島聖堂がありました。幕府直轄の藩校が寛政二年（1790）に準備され、寛政九年（1797）に昌平坂学問所として開設されました。幕府による出版物はすべて「官版」ですが、普通「官版」といえば昌平坂学問所の刊行物を指します。昌平坂学問所では、漢籍約二百種を刊行しました。昌平坂学問所で使用するだけではなく、一般の書肆を通じて売りましたので、諸国の藩校をはじめ、広く行き渡りました。

幕府の学校は、漢学を教えた昌平坂学問所のほか、日本古来の文学・歴史・有職故実を研究する和学講談所、洋学を学ぶ開成所、医学館などがありました。安政二年（1855）創設の洋学所が翌年蕃書調所となり、文久二年（1862）に洋書調所になり、さらに翌文久三年、開成所と名称が改められました。明治に入り、新政府のもと開成学校となりました。現在の東京大学の前身です。

昌平坂学問所の刊行物と開成所の刊行物を、一点ずつ紹介いたします。

### 8. 東華録十六卷 十六冊

史部編年類。清、蔣良騏撰。天保四年（1833）、昌平坂学問所刊本。登録番号:22.06 sh95。清の始まりから、雍正時代（1735）までを編年体で記した史書です。乾隆三十年（1765）に歴史を編纂する国史館が再開されたとき、その記録を利用して編纂されました。もともと三十二巻本ですが、本書は十六巻に再編されています。署名は国史館が東華門のなかにあったためです。王先謙が続編を編んださいに、蔣良騏の『東華録』も再編纂されました。

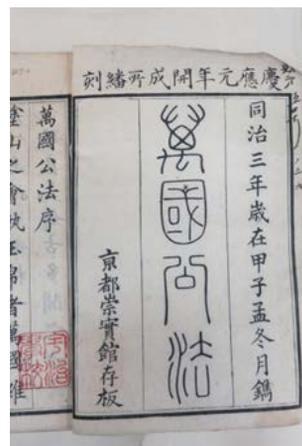


### 9. 万国公法四卷 六冊

史部政書類。美国、惠頓撰。美国、丁韪良訳。慶応元年（1865）、開成所刊木活字印本。印記「宇治学校」。登録番号:329 Te21。明治六年

（1873）に箕作麟祥が「国際法」という訳語を使用するまで、「万国公法」という語が一般的でした。本書は米国人の惠頓（ホウィートン）が著し、丁韪良が漢訳した京都

（北京）崇実館同治3年（1864）刊本に西周が訓点をつけています。前年に清で刊行された本を翌年に日本で出版するのですから、すばやい仕事といえるでしょう。この本も木活字版だと思われます。巻末の広告から、江戸豎川三之橋の老皂館（万屋兵四郎）という書肆が販売したことがわかります。蔵書印「宇治学校」の宇治は宇治山田の宇治でしょう。



## 資料解説

資料解説は、附属図書館研究開発室協力大学教員の吉丸雄哉（人文学部准教授）によるものです。展示品はすべて、三重大学附属図書館の所蔵本です。

## 参考文献

- 井上進輯『三重大学漢籍目録—1995』（三重大学附属図書館、平成7。開架027.9 MI15 95）。  
笠井助治『近世藩校に於ける出版書の研究』（吉川弘文館、昭和37。開架022.3 KA72）。  
笠井助治『近世藩校に於ける学統学派の研究』上（吉川弘文館、昭和44。開架372.1 KA72 1）。  
笠井助治『近世藩校の総合的研究』（吉川弘文館、昭和57。開架372.1 KA72。昭和37版の再刊）。  
大石学編『近世藩制・藩校大事典』（吉川弘文館、平成18。開架参考210.5 Ki46）。  
木村礎・藤野保編『藩史大事典』4（雄山閣、平成1。開架210.5 H29 4）。  
村山吉廣『藩校 一人を育てる伝統と風土』（明治書院、平成23。開架 371.1 Mu62）。  
神田信夫・山根幸夫編『中国史籍解題辞典』（燎原書店、平成1）。



学習館



紀伊蘭学所



松阪学問所



有造館

三重大学附属図書館リニューアル記念  
特別展示「藩校の漢籍」  
発行：三重大学附属図書館  
平成25年4月10日